

•知的障害者のための音楽療法

現在の「癒し」ブームの中で、音楽による癒しに人々の関心が集まっている。本論文では障害者のための音楽療法の実践を踏まえ、音楽による効果や、現在の音楽療法における問題点等について述べていく。

まず第一章では、音楽療法の歴史について取り上げる。現在、欧米を中心として広く行われている音楽療法は、20世紀の初頭にアメリカで起こったものである。日本で広く行われている音楽療法も、イギリスやアメリカでの音楽療法を手本として行われており、精神病院において、また障害をもった子どもを対象とした領域で活動が行われている。第一節では、音楽が近代音楽療法として確立するまでの経緯を追い、第二節では現在までの日本における音楽療法の発展について述べていく。

第二章ではさまざまな知的障害についてみていく。障害の起こる時期や、障害の種類、そして障害の原因から、治療によって期待できる効果や、療育方法やその開始時期について考慮し、音楽療法との結びつきを明らかにする。日本では、最初に知的障害児（者）を対象とした音楽療法の研究が進められ、発達してきた。知的障害は、医学的な治療は困難であるため、医学的療法ではなく適切な発達刺激を保証し、知的活動、適応、生活および作業能力の向上を目指す療育が主となるからである。そして、次節では、障害児のための学校教育の現場では音楽がどのようにして用いられているかについて指導要領を基にして述べていく。

知的障害児が成人した後で、より豊かな生活を送るための一つ的手段として音楽療法を用いる場合がある。そこで第三章では、音楽療法の実践について述べる。この時、障害児の音楽療法と異なり、発達促進を目的としたものでなく、生活の質の向上を目指すことが多い。具体的な実践として、ある施設に入居している重度の知的障害者6人を対象として、セッションを行った。目的は「自己表現を促し、QOL(Quality Of Life)向上を目指し、クライアントが個人として重要であるということの実感を促す」ことである。

このセッションでは、音楽的技法 (BED-MUSIC) というテクニックを用いた。BED-MUSICの中で用いたテクニックは、コールテクニック、エコーテクニック、ダイアログであった。これらのテクニックは、セッションの中でクライアントの精神の安定や、クライアント自身の自己認知を助け、他者を認知させることを助けるために用いられた。エコーテクニック、ダイアログを用いる時には、クライアントの反応を見ながら、伴奏の強弱、ダイナミックス、リズム、テンポを変化させ、できるだけ即時的な対応ができるように音楽をつける即応演奏を用いた。障害が重くなるほど、理解力が低下する。つまり、クライアントが

音楽自体を理解するために、リズムやテンポ、コード進行を一人一人に合わせて変える必要があるのだ。セラピストとクライアントとの共通の音楽に即時的に対応していくことで、クライアントに最適な音楽を提供することができると考えられる。これらのテクニックや、用いられた音楽の特徴については第三章第二節で明らかにする。

セッションの結果、クライアントは音楽に対して自信を持ち、様々な活動を行うことによって、最初の目的を達成できた。また、音楽で自信をつけたことによって、他人を意識することによる社会性の拡大、集中持続時間の増大、そして他人との相互交渉もうまくなっていったと言える。いくつかの資料や、音楽療法の実践を踏まえたうえで、日本の音楽療法にいくつかの問題点が挙げられる。確かに現在、音楽療法は発展中の分野であるのだが、研究者と臨床家との間の考え方、意見の相違が見られる。評価基準が曖昧である。日本では、音楽療法士の資格認定制度の問題が残っている。そして、音楽療法の行われている分野が、欧米と比べて、限られているということなどである。

今後の課題としては、音・音楽そのものの人間に対する影響を、客観視できる根拠とともに示すことだと考える。